

新 雲仙プロジェクト通信 9号

平成25年11月17日(日)

今回は、長崎大学環境科学部の深見准教授と学生さん 21 名を迎えての、ミヤマキリシマ保全活動のご報告です。この企画は、今年の9月18日に「NPO法人 奥雲仙の自然を守る会」の中田代表、木田さん、それと共助研から金尾さんと私(矢ヶ部)が、深見先生に活動のご相談でお伺いしたときから、深見先生の積極的なご協力をいただき、とんとん拍子で進んできた企画でした。

長崎大学も、フィールド教育を重要視しており、その現場を探している矢先の、奥雲仙田代原地区の提案となりました。なんとか、田代原に若者のパワーを呼び込みたいと苦心していましたが、タイミングのいいラッキーなことだと、中田代表、木田さん、私ども共助研も大喜びをしたのですが、やはり、当日を迎え、学生さんたちが田代原に興味を持ってもらえるだろうか、大きな不安を抱えつつその日を迎えることとなりました。

◆◆中田代表と環境省雲仙自然保護官岸田氏の現場の説明からスタートしました

当日朝までしっかりと雨が降り、冷たい風が吹きすさぶ田代原では、今か今かと長崎大学の深見先生と学生さんを待っていましたが、雲仙市から派遣された運転手さんが道に迷い、先生ご一行は迷子となったとの連絡が。地元の方が、レスキュー隊のごとく迷子の先生ご一行をキャッチし、無事に田代原へ到着するやいなや、突然、若い学生さんのパワーが田代原に広がりました。そして、立て替えて新しくなった会場には、あふれるばかりの若い人が!!! (下 写真参照ください!!!)



最初に、中田代表が挨拶をされ、環境省の岸田さんから自然公園についての解説と田代原の位置づけ、そして、阿蘇の草原保全の事例紹介がされました。到着したばかりで、早速の講義ということで、みなさん少し緊張気味でしたが、特別参加の深見先生の息子さんの元気で明るい発言が、最高のアイスブレイクになりました！！

岸田氏の説明の中でも、特に、田代原地区が、自然公園の第2種特別区域に指定されていることで、農林業等との調整を行ったうえで環境を保全することや、いろいろな制約があること等の説明があり、学生さんたちは真剣に、また熱心に耳を傾けていました。



◆ともかく、おいしい食事！！ おなかがいっぱいになったら万頭づくり体験

大勢の参加者がいる中、待望の食事の時間です。育ちざかりの学生さんたちは、朝早く出たはずなのに、迷子になったせいで時間が押してしまい、お昼になってもお預けの状態となりましたので、食事の時間は、学生さん、地元の方々、JCCA ヌパ-が入り混じった配席で、みなさん楽しそうに食事をされました。空腹は最高の料理人といいますが、地元のおいしい料理を、しっかり勉強した空腹の状態ですらに、みんなとワイワイと楽しくいただく……、もう最高の、至福の、幸せな、時間です。



JCCA ヌパ-も楽しそう！！

← 食事の風景

食事と万頭づくり体験がひと段落したところで、次の講義「高原の身体・精神に及ぼす影響」として、精神科医の田代医師から話がありました。同じ休憩をするのでも、街の中ではいくら休んでも体の改善効果が見られなかったことに対し、高原の中では、しっかりと体がリフレッシュするという実績データのご報告がありました。

雨あがりのため、草刈り等の保全活動は断念せざるを得ませんでした。ともかく、現場を見てもらおうということで、寒い風が吹きすさぶ中、ミヤマキリシマが生息している牧草地へ。いつもは、離れた場所にいる牛も、なぜかこの日は、近場において、学生さんたちを迎えることとなりました。

◆ミヤマキリシマの保全活動に関する現場作業

牛さんたちの出向かえを受け、雨に濡れた足場の悪い現場に到着し、木田氏より、田代原のミヤマキリシマの現状、そして、これまでの活動の報告がしっかりとなされました。

また、保全活動地区の中にあるビオトープの池では、前回も説明いただいたアダプト会の林田会長がお見えになり、現在、このビオトープを活かして、ホタルが棲むような場所にすべく活動をしているとの報告がなされました。おそらく、2年後には、ホタルの乱舞が見られるのではないかとということです。

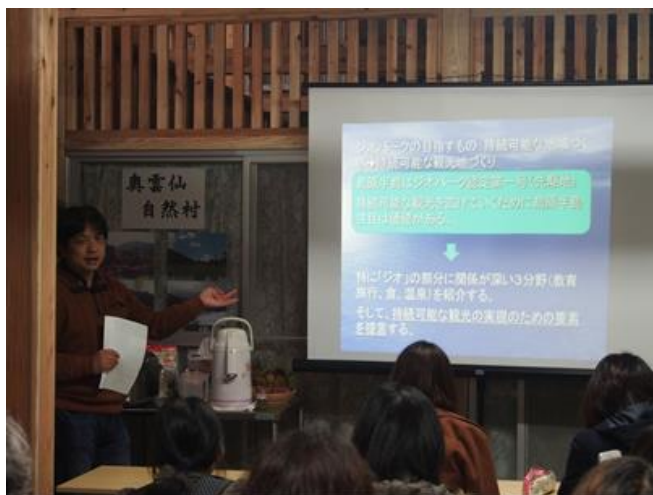


◆深見准教授の講演と、学生さんたちとの意見交換会

現場の状況を確認した後は、深見准教授からの講義「ジオパークでの体験型観光について」ということで、講義をいただきました。

現在求められている観光とは何か、そして、日本発のジオパークに指定された雲仙を含む島原半島の観光地作りとはどのようにあるべきなのか、非常に興味深い講義が進められました。

深見先生も、いつも相手にしている学生さんたちがほとんどなので、日頃の講義のノリで、ビシビシと学生さんへの投げかけを加えながら、話が進められました。結論としては、「ジオパーク」という明確な切り口が提示されているため、その視点で観光資源を見つめ直せば、自ずと地域のあるべき方向性は見いだせるということ、また、それは持続可能なものでなければいけない等でした。



さて、学生さんからの意見やアイデアをいただくこととなり、4年生から1年生までのそれぞれの代表者の方から、ここ田代原が今後若者にも来てもらうための意見発表をしていただきました。主な意見は次のようなものですが、しっかりとした意見を持っているなあというのが感想です。

- 田代原へ来る交通手段を学生は持たないので、ツアーバス等があると参加しやすくなるのではないかなと思う。学生にも保全活動の案内が来て、交通手段があるのであれば、参加したい。
- 田代原という場所、ミヤマキリシマが生息していることをもっとマスコミ等のメディアに伝える必要があるのではないかな。
- 民宿ができるということであるので、日帰りではなく宿泊の企画を考えるといいのではないかな。
- 田代原の魅力は、写真で伝えることが効果があるのではないかな（雑誌等の記事の掲載の在り方）
- 人の心をつかむネーミングを行うと、印象が強くなる。 などなどなど。

◆最後に

私たち共助研が、奥雲仙田代原の活動に参加し始めてちょうど1年目を迎えるこの時に、長崎大学とのコラボ活動ができたということは、非常に意義あるものと思います。

また、JCCA九州支部の環境・都市等技術委員会が、今年の現場研修会の企画にも取り込んでいただき、JCCA ヌガ-も参加していただいたことも併せて大きな成果であったと考えます。企画に組み込んでいただいた森脇委員長以下委員会メンバーの方々には感謝感謝です。

今回の共助研、JCCA 関連メンバーの参加者紹介

共助研から、山下さん、金尾さん、矢ヶ部

JCCA九州支部 環境・都市等技術委員会からは、

森脇委員長、奥津さん、脇根さん、大濱さん、そして一般参加の荒牧さん

本日の一枚



若さハツラツの長崎大学の学生さんたちを迎えてのミヤマキリシマ保全活動の記念写真

【第9号 新雲仙プロジェクト通信作成担当：矢ヶ部】

次ページ以降に、深見先生のプレゼン資料をつけていますので、ご参考ください。

島原半島「質」の高い観光地として
～「ジオ」が つなぎ、引き出す地域の魅力～

長崎大学環境科学部フィールドスクール
2013/11/17

現在、求められる観光

観光地で発生している問題

- 自然的な自然への悪影響
大混雑した観光に伴って引き起こされる環境汚染、平素の観光地部、観光の立派となる大衆の特殊な行動(早島2012)
- 観光地のホテルの乱立による景観の喪失の危険(早川, 1998)

観光客のニーズの変化

「見る、知る、体験する」観光が人気になりつつある。
観光客は観光によって多くのものを得たい。

→ 持続可能な観光が求められる
持続可能な観光=「質」の高い観光
→ ジオパーク

ジオパークとは

ジオパーク(geosphere park)という言葉の意義を組み合わせで作った言葉
geo=ギリシア語で「大地」「地質」などを意味する言葉の接頭語

ユネスコが推進、学術的価値を有する景観や地質を管理し、それらによって地域や地球の成り立ちが理解できる自然公園。
世界遺産の主目的が重要な遺産の保存にあるのに対し、ジオパークでは景観と環境を保全させようとするところにある。

★ 持続可能な観光地を作る仕組みがある。

世界ジオパーク
世界ジオパークネットワークに認定された地域
世界ジオパークネットワーク加盟

日本ジオパーク
日本ジオパークネットワークに認定された地域
世界ジオパーク認定を目指す地域



ジオパークの分布
2012年11月現在



日本のジオパーク

ジオパークの目指すもの: 持続可能な地域づくり → 持続可能な観光地づくり

島原半島はジオパーク認定第一号(先駆地)
持続可能な観光をを広げていくために島原半島
注目は価値がある。

↓

特に「ジオ」の部分に関係が深い3分野(教育旅行、食、温泉)を紹介する。
そして、持続可能な観光の実現のための要素を提言する。

島原半島

＜島原半島の主な地域資源＞

温泉



食文化



海水



歴史遺跡



＜歴史＞

寛永14年(1637)「島原の乱(島原・大塚一揆)」
寛政4年(1792)「島原大変肥後藩軍 豊後守景満大島山の大本営により大津波発生」
平成5(1993)年11月17日 豊後守景満 一平成(1993)年
平成19年(2007)11月 豊後守景満 豊後守景満
平成20年(2008)10月20日 島原ジオパーク認定
平成21年(2009)8月22日 島原ジオパーク認定

島原半島の位置
島原半島は長門半島の北側で構成されている。
中央に豊後守景満(1990年噴火)、
有明海、福岡に囲まれる。

島原半島

島原半島の火山活動の歴史
1674年の噴火、利用されてきた
1914年の噴火、利用されてきた
2001年の噴火、利用されてきた

＜島原半島ジオパーク＞

「ジオパーク」「ジオ」の名がさまざまな分野の資源を一体化させる
地域資源を火山活動が成り立ちという共通点で結び、地域資源を一体化させて地味資源に利用していこう!!

→ 持続可能な観光地づくりが実現する
→ 持続可能な観光地づくりが実現する

島原半島における「ジオパーク」の効果

島原半島ジオパーク事務局長 藤田 隆

島原半島ジオパーク推進連絡協議会事務局による調査
2011年7月15日から同年8月31日にわたって、島原半島内の観光施設、宿泊施設、および観光関連機関11機関に「島原半島サマーキャンペーン」と題した、観光客へのアンケート調査を実施した。

「島原半島ジオパークの見学」を目的に含む観光客が約14%

これまでジオパークの取り組みに対して積極的だった地域住民の意識を変える結果、

「ジオパーク」への期待が高まる。

活動の例：教育旅行、食、温泉



島原半島を訪れる全観光客数
ジオパークを観光目的に含む観光客数
ジオパークの見学を目的に含む観光客

注1：ジオパーク認定施設は「島原半島ジオパーク」認定施設を指す。注2：この調査は、2011年7月15日から同年8月31日の期間に行われた。

注3：ジオパーク認定施設は「島原半島ジオパーク」認定施設を指す。注4：この調査は、2011年7月15日から同年8月31日の期間に行われた。

教育旅行

ジオパーク教育旅行


<対象>

- ・修学旅行生
(文部科学省が推奨するスーパーサイエンスハイスクール登録の学校 地学学習必須の学校等)
- ・一般観光客

<内容>

- ・ジオサイト(ジオパーク内の貴重な地質学的資源)巡回
- ・ジオパークガイドによる解説

島原半島(現地)でしか学べないものを学びに来てもらっている!



食

<じゃがもちやん> <島原半島べそめんとん> <雲仙こぶたかな>



島原半島でしか学べない食べ方や島原半島に来てもらうことで学べてもらうことのできない観光客を惹きつけてもらう活動。

- ・湯水でそうめん渡し
- ・温泉でジャガイモ・アスパラガス・ブロッコリーをゆでる
- ・雲仙こぶたかなを使った調理体験学習(スローフード体験)
- ・湯せんべい、むしがま

島原半島にしかない「食」を堪能してもらっている!



温泉

- ・マストツーリズムからの転換を図る温泉地 景観のよい温泉へ(夕日、海)
- ・温泉を中心とした回遊エリアの形成 「ほっとふっと105」周辺
- ・未利用温泉水の有効活用 小浜温泉水バイナリー発電 (2013年春より全国初の実証実験開始) →産業観光資源

地域の自然資源を最大限に活用している!!



おわりに～持続可能な観光地として

島原半島では・・・
「ジオパーク」の切り口で観光資源を見ることで地域の特色を活かす方向性ははっきりしている。

◎持続可能な観光地を実現する要素として

- ・地域の特色を最大に活かした場にする。
- ・地域の特色を「かみしめて」もらうようにする。